

【一般演題1】 第3席

「文化文政年間の経穴学について」

愛知 楠本 高紀

文化・文政年間（1804～1830）前後は石坂流に代表されるように西洋医学の影響をふまえて独特の鍼灸術をうちたてるもの、民間灸法を集大成したものといえる『名家灸選』を代表とする灸療の評価、および刺絡の隆盛が認められる。また清朝考証学が広く認識されるという時代的風潮をうけて経穴学文献の考証的研究が進んだ時期でもある。

その文化・文政年間前後の代表的経穴書といえば多紀元簡『揆穴集説』（1791）、原南陽『経穴彙解』（1803）、小坂元祐『経穴纂要』（1810）があげられる。この3書は江戸後期の日中の経穴学を集大成した好著で、特に『経穴彙解』は形態を『甲乙経』を主とするという、それまでの『十四経發揮』『類経』を主とするものとは異にする特異的な書である。

また従来、文化・文政年間前後の経穴書というと3書以外には見るべきものはないとされてきた。しかし近年、江戸期の鍼灸経穴書が刊行されるにあたり、貴重な諸業績が明確になってきた。それは宮本春仙、中島元春、堀元厚、味岡三伯らの業績である。

さらに仁和寺本『医心方』膳録（1791）、仁和寺本『太素』模刊（1820）などを忘れてはならない。

今回は、考証学派の人達と先人達の業績を検討することにより文化・文政年間前後における経穴学の実態像に迫ることとする。